

河霧

国木田独歩

青空文庫

上田豊吉がその故郷を出たのは今よりおよそ二十年ばかりのことであった。

その時かれは二十二歳であつたが、郷党みな彼が前途の成功を卜してその門出を祝した。

『大いなる事業』ちよう言葉の宮の壮麗しき台を金色の霧の裡に描いて、かれはその古き城下を立ち出で、大阪京都をも見ないで直ちに東京へ乗り込んだ。

故郷の朋友親籍兄弟、みなその安着の報を得て祝し、さらにはかれが成功を語り合つた。

しかるに、ただ一人、『杉の杜のひげ』とあだ名せられて本名

は並木善兵衛なみきぜんべえという老人のみが次のごとくに言つた。

『豊吉が何をしでかすものぞ、五年十年のうちににはきっと蒼あおくなつて帰つて来るから見ていろ。』

『なぜ?』その席にいた豊吉の友が問うた。

老人は例の雪のような髭鬚ひげをひねくりながらさみしそうに悲しそうに、意地のわるそうに笑つたばかりで何とも答えなかつた。

そこで少しばかりこの老人の事を話して置くが、「杉の杜もりのひげ」と言われてその名が通つてゐるだけ、岩——のものでそのころこの奇体な老人を知らぬ者はないほどであつた。

髭鬚ひげが雪のように白いところからそのあだ名を得たとはいふものの小さなきたならしい老人で、そのころ七十いくつとかでもす

こぶる強壯なこつこつした体格からだであつた。

この老人がその小さな丸い目を杉の杜もりの薄暗い陰でビカビカ輝ひからせて、黙つて立つてゐるのを見るとだれも薄氣味の悪い老翁じいさんだと思う、それが老翁ばかりでなく「杉の杜」というのが、岩——の士族屋敷ではこの「ひげ」の生まれない前のもつと前からすでに氣味の悪いところになつてゐるので幾百年かたつて今はその根方ねがたの周囲まわり五抱いっかかえもある一本の杉が並木善兵衛の屋敷の隅に聳そツ立つついてそこがさびしい四辻よつじになつてゐる。

善兵衛は若い時分から口の悪い男で、少し変物へんぶつで右左を間違えて言う仲間の一人であつたが、年を取るとよけいに口が悪くなつた。

『彼奴は遠からず死ぬわい』など人の身の上に不吉きわまる予言を試みて平氣でいる、それがまた奇妙にあたる。むづかしく言えば一種靈活な批評眼を備えていた人、ありていに言えば天稟の直覺力が銳利である上に、郷党が不思議がればいよいよ自分もよけいに人の氣質、人の運命などに注意して見るようになり、それがおもしろくなり、自慢になり、ついに熟練になつたのである。

彼は決してトうらない者ではなかつた。

そこで豊吉はこの「ひげ」と別に交際もしないくせに「ひげ」は豊吉の上にあんな予言をした。

そしてそれが二十年ぶりにあたつた。あたつたといえばそれだけであるが、それに三つの意味が含まれている。

『豊吉が何をしでかすものぞ、』これがその一、

『五年十年のうちに、』これがその二、

『きっと帰つて来る、』これがその三。

薄氣味の悪い「ひげ」が^{いたち}黄鼠^{ひか}のような目を輝らせて杉の杜の陰からにらんだところを今少し詳しく言えば、

豊吉は善人である、また才もある、しかし根^{こん}がない、いや根も随分あるが、どこかに影の薄いような氣味があつて、そのするこ^とが物の急所にあたらない。また力いっぱいに打ち込んだ棒の音が鈍く反響するというようなところがある。

豊吉は善人である、情に厚い、しかし胆^{きも}が小さい、と言うよりもむしろ、気が小さいので磯^{いそ}ぎんちやくと同質である。

そこで彼は失敗やら成功やら、二十年の間に東京を中心としておもに東北地方を舞台に色々な事をやつて見たが、ついに失敗に終わつたと言うよりもむしろ、もはや精根の泉を涸からしてしまつた。

そして故郷へ帰つて來た。漂つて來たのではない、實に帰つて來たのである。彼はいかなる時にもその故郷を忘れ得なかつた。いかにかれは零落するとも、都の巷に白馬どぶろくを命として埃芥あくたのよう沈澱ちんでんしてしまう人ではなかつた。

しかし「ひげ」の「五年十年」はあたらなかつた、二十年ぶりに豊吉は帰つて來た、しかも「ひげ」の「五年十年」には意味があるので、実にあたつたのである。すなわち豊吉はたちまち失敗

してたちまち逃げて帰つて来るような男ではない、やれるだけはやつて見る質たちであつた。

さて「杉の杜もりのひげ」の予言はことごとくあたつた。しかしさうがの「ひげ」も取り逃がした予言が一つある、ただ幾百年の間、人間の運命をながめていた「杉の杜」のみは予め知つていたに違いない。

夏の末、秋の初めの九月なかば日曜の午後一時ごろ、「杉の杜」の四辻にぼんやり立つてゐる者がある。

年のころは四十ばかり、胡麻ごましろ白頭あたまの色の黒い頬ほおのこけた面おもな長がな男である。

汗じみて色の変わつた縮布ちぢみの洋服を着て脚絆きやはんの紺こんもあせ草鞋わらじもぼろぼろしている。都からの落人おちびとでなければこんな風ふうをしてはいない。すなわち上田豊吉である。

二十年ぶりの故郷の様子は随分変わつていた。日本全国、どこの城下も町は新しく変わり、士族小路は古く変わるのが例であるが岩——もその通りで、町の方は新しい建物もでき、きらびやかな店もできて万よろず、何となく今の世のさまにともなつているが、士族屋敷の方はその反対で、いたるところ、古い都の断礎だんそのような者があつて一種言うべからざる沈静の気がすみずみまで行き渡つている。

豊吉はしばらく杉の杜の陰で休んでいたが、気の弱いかれは、

かくまでに零落おちぶれてその懐かしい故郷に帰つて來ても、なお大声をあげて自分の帰つて來たのを言いふらすことができない、大手を振つて自分の生まれた土地を歩くことができない、直ちに兄の家うち、すなわち自分の生まれた家に行くことができない。

かれは恐る恐るそこらをぶらつき始めた。夢路ゆめじを歩む心地こころちで古い記憶の端々はしばしをたどりはじめた。なるほど、様子が変わつた。しかしやはり、変わらない。二十年前まえの壁の穴が少し太くなつたばかりである、豊吉が棒の先でいたずらに開けたところの。

ただ豊吉の目には以前より路幅みちはばが狭くなつたように思われ、樹きが多くなつたように見え、昔よりよほどさびしくなつたように思われた。蟬せみがその单调な眠そうな声で鳴いている、寂しんとした日

の光がじりじりと照りつけて、今しもこの古い土族屋敷は眠つた
ように静かである。

杉の生垣いけがきをめぐると突き当たりの煉壙ねりべいの上に百日紅ひやくじつこうが碧みどりの空に映じていて、壁はほとんど薦つたで埋もれている。その横に門がある。櫻かし、梅だいだい、橙しゆろなどの庭木の門の上に黒い影を落としていて、門の内には棕櫚しゆろの二、三本、その扇めいた太い葉が風にあおられながらぴかぴかと輝ひかつている。

豊吉はうなずいて門札を見ると、板の色も文字の墨も同じように古びて「片山四郎」と書いてある。これは豊吉の竹馬ちくばの友である。

『達者たっしゃでいるらしい』かは思つた、『たぶん子供もできて

いることだろう。』

かれはそつと内をのぞいた。桑園の方から家鶏が六、七羽、一羽の雄に導かれてのそのそと門の方へやつて来るところであつた。

たちまち車井の音が高く響いたと思うと、『お安、金盥かなだらいを持つて来てくれる』という声はこの家の主人らしい。豊吉は物に襲われたように四辺あたりをきよろきよろと見まわして、急いで煉ねりべ塀かどいの角を曲がつた。四辺あたりには人らしき者の影も見えない。

『四郎だ四郎だ、』豊吉はぼんやり立つて目を細くして何を見るともなくその狭い樹きの影の多い路の遠くをながめた。路の遠くには陽炎かげろうがうらうらとたつている。

一匹の犬が豊吉の立っているすぐそばの、寒竹の生垣の間から突然現われて豊吉を見て胡散うさんそうに耳を立てたが、たちまち垣の内で口笛が一声二声高く響くや犬はまた駆け込んでしまつた。豊吉は夢のきめたようにちよつと目をみはつて、さびしい微笑を目元に浮かべた。

すると、一人の十二、三の少年が釣竿を持つて、小陰から出て来て豊吉には気が付かぬらしく、こなたを見向きもしないで軍歌らしいものを小声で唱うたいながらむこうへ行く、その後を前の犬が地をかぎかぎお伴ともをしてゆく。

豊吉はわれ知らずその後について、じつと少年の後ろ影を見ながらゆく、その距離は数十歩である、実は三十年の歳月であつた。

豊吉は昔のわれを目の前にありありと見た。

少年こどもと犬との影が突然消えたと思うと、その曲がり角のすぐ上の古木こぼく、昔のままのその枝ぶり、蝉せみのとまりどころまでが昔そのままなる——豊吉は『なるほど、今の児こはあそこへ行くのだな』とうれしそうに笑わらつて梅の樹きを見上げて、そして角を曲がつた。

川柳かわやなぎの陰になつた一間幅けんぱくぐらいの小川ほりの辺に三、四人の少年こどもが集まつている、豊吉はニヤニヤ笑つて急いでそこに往いつた。

大川の支流のこの小川のここは昔からの少年の釣り場である。

豊吉は柳の陰に腰掛けて久しぶりにその影を昔の流れに映した。

小川の流れはここに来て急に幅広くなつて、深くなつて静かになつて暗くなつている。

柳の間をもれる日の光が金色の線を水の中に射て、澄み渡つた。水底の小砂利が銀のように碧玉のように沈んでいる。

少年はかしここの柳の株に陣取つて釣つていたが、今来た少年の方を振り向いて一人の十二、三の少年が

『檜山！ これを見ろ！』と言つて腹の真つ赤な山の尺にも

近いのを差し上げて見せた。そして自慢そうに、うれしそうに笑つた。

『上田、自慢するなッ』と一人の少年が叫んだ。

豊吉はつツと立ち上がりつて、上田と呼ばれた少年の方を向いて眉に皺を寄せて目を細くしてまぶしそうに少年の顔を見た。そしてそのそばに往つた。

『どれ、今のをお見せなさい、』と豊吉は少年の顔を見ながら言った。

少年はいぶかしそうに豊吉を見て、不精無精に籠の口を豊吉の前に差し向けた。

『なるほど、なるほど。』豊吉はちょっと籠の中を見たばかりで、少年の顔をじつと見ながら『なるほど、なるほど』といつて小首を傾けた。

少年は『大きいだろう！』と鋭く言い放つてひつたくるように籠を取つて、水の中に突き込んだ。そして水の底をじつと見て、もう傍らに人あるを忘れたようである。

豊吉はあきれてしまつた。『どうしても阿兄の子だ、面相の

よく似ているばかりか、今の声は阿兄あにきにそつくりだ』となおも少こ
 年の横顔どもを見ていたが、画えだ、まるで画であつた！ この二人の
 さまは。

川柳は日の光にその長い青葉をきらめかして、風のそよごとに黒い影と入り乱れている。その冷やかな陰の水際みぎわに一人の丸く肥ふとつた少年こどもが釣りを垂たれて深い清い淵ふちの水面を余念なく見てくる、その少年を少し離れて柳の株に腰かけて、一人の旅人、零落と疲労をその衣服きものと容貌かおに示し、夢みるごときまなざしをして少年こどもをながめている。小川の水上みなかみの柳の上を遠く城山じょうざんの石垣いしがのくずれたのが見える。秋の初めで、空気は十分に澄んでいる、日の光は十分に鮮やかである。画だ！ 意味の深い画である。

豊吉の目は涙にあふれて來た。またた瞬きをしてのみ込んだ時、かれは思わずその涙をはふり落とした。そして何ともいえない懷しさを感じて、『ここだ、おれの生まれたのはここだ、おれの死ぬのもここだ、ああうれしいうれしい、安心した』という心持ちが心の底からわいて來て、何となく、今までの長い間の辛苦かんなん艱難かんなんが皮のむけたように自分を離れた心地がした。

『お前のおとつさんの名はなんていうかね』と豊吉は親しげに少こども年に近づいた。

少年は目を丸くして豊吉を見た。豊吉はなおも親しげに、
『貫かん一いちといふだらう?』

少年は驚いて豊吉の顔をじつと見つめた。豊吉は少し笑いを含こども

んで、

『貫一さんは丈夫かね。』

『達者だ。』

『それで安心しました、ああそれで安心しました。お前は豊吉と
いう叔父さんのことをおとつさんから聞いたことがあろう。』

少年はびっくりして立ちあがつた。

『お前の名は?』

『源造。』

『源造、おれはお前の叔父さんだ、豊吉だ。』

少年は顔色を変えて竿さおを投げ捨てた。そして何も言わず、士族

屋敷の方へといつさんに駆けていった。

ほかの少年らも驚いて、豊吉を怪しそうに見て、急に糸を巻くやら籠を上げるやら、こそこそと逃げていつてしまつた。

豊吉はあきれ返つて、ぼんやり立つて、少年らの駆けて行く後ろ影を見送つた。

『上田の豊さんが帰つたそうだ』と彼を記憶しうわさしていた人々はみんなびっくりした。

豊吉二十のころの知人みな四十五十の中老になつて、子供もあれば、中には孫もある、その人々が続々と見舞にくる、ことに女人の人、昔美しかつた乙女の今はお婆さんの連中が、また続々と見舞に来る。

人々は驚いた、豊吉のあまりに老いぼれたのに。人々は祝つた、
 その無事であつたを。人々は氣の毒に思つた、何事もなし得ない
 で零落おちぶれて帰つたのを。そして笑つた、そして泣いた、そして言
 葉を尽くして慰めた。

ああ故郷ふるさと！ 豊吉は二十年の間、一日も忘れたことはなかつ
 た、一時の成功にも一時の失敗にも。そして今、全然失敗して帰
 ツて來た、しかしかくまでに人々がわれに優しいこととは思わな
 かつた。

彼は驚いた、兄をはじめ人々のあまりに優しいのに。そして泣
 いた、ただ何とはなしにうれしく悲しくつて。そしてがつかりし
 て急に年を取ツた。そして希望なき零落の海から、希望なき安心

の島にと漂着した。

かれの兄はこの不幸なる漂流者を心を尽くして介抱した。その子供らはこの人のよい叔父にすつかり、懐いてしまつた。兄貫一の子は三人あつて、お花というが十五歳で、その次が前の源造、末が勇いさむという七歳ななつのかあいの兒こである。

お花は叔父を慰め、源造は叔父さんと遊び、勇は叔父さんにあまえた。豊吉はお花が土蔵くらの前の石段に腰掛けて唱うたう唱歌をききながら茶室の窓に倚りかかつて居眠り、源造に誘われて釣りにかけて居眠りながら釣り、勇の馬になつて、のそのそと座敷をはいまわり、馬の嘶なき声を所望しよもうされて、牛の鳴くまねと間違えて勇に怒おこられ、家じゆうを笑わせた。

かかる際^{ひま}にお花と源造に漢書の素読^{そどく}、数学英語の初步などを授けたが源因^{もと}となり、ともかく、遊んでばかりいてはかえつてよくない、少年^{こども}を集めて私塾^{じじゅく}のようなものでも開いたら、自分のためにも他人^{ひと}のためにもなるだろうとの説が人々の間に起こつて、兄も無論賛成してこの事を豊吉に勧めてみた。

豊吉は同意した。そして心ひそかに歓んだ、その理由は、かれ初めより無事に日を送ることをよろこばなかつた、のみならずついに何事もなさず何をしてかすることなく一生空^{むな}_{ひと}しく他の厄介で終わるということは彼にとつて多少の苦痛であつた。

希望なき安心の遲鈍なる生活もいつしか一月ばかり経つて、豊吉はお花の唱歌を聞きながら、居眠つてばかりいない、秋の夕空

晴れて星の光も鮮やかなる時、お花に伴われてかの小川の辺など
 散歩し、お花が声低く節哀れに唱うを聞けばその沈みはてし心か
 すかに躍りて、その昔、失敗しながらも煩悶しながらもある仕
 事を企ててそれに力を尽くした日の方が、今の安息無事よりも願
 わしいように感じた。

かれは思った、他郷よそに出て失敗したのはあながちかれの罪ばかりでない、実にまた他郷の人の薄情つけなきにもよるのである、さればもしこのような親切な故郷の人々の間にいて、事を企てなば、必ず多少の成功はあるべく、以前のような形なしの失敗はあるまいと。

かれは自分を知らなかつた。自分の影がどんなに薄いかを知ら

なかつた。そして喜んで私塾設立の儀を承諾した、さなきだにかれは自分で何らの仕事をか企てんとしていて言い出しにくく思つていたところであるから。

「杉の杜の鬚」の予言のあたつたのはここまでである。さてこの以後が「鬚」の予言しのこした豊吉の運命である。

月のよくされた夜の十時ごろであつた。大川が急に折れて城山の麓をめぐる、その崖の上を豊吉ひとり、おのが影を追いながら小さな藪路をのぼりて行く。

藪の小路を出ると墓地がある。古墳累々と崖の小高いところに並んで、月の光を受けて白く見える。豊吉は墓の間を縫いながら

行くと、一段高いところにまた数十の墓が並んでいる、その中の
ごく小さな墓——小松の根にある——の前に豊吉は立ち止まつた。
この墓が七年前に死んだ「並木善兵衛之墓」である、「杉の杜
の鬚」の安眠所である。

この日、兄の貫一その他の人々は私塾設立の着手に取りかかり、
片山という家の道場を借りて教場にあてる事にした。この道場と
いうは四間けん^{うち}と五間の板間いたのまで、その以前豊吉も小学校から帰り路、
この家の少年こどもを餓鬼大将として荒れ回つたところである。さらに
維新前はお面めん^{こて}籠手まことの真の道場であつた。

人々は非常に奔走して、二十人の生徒に用いられるだけの机と
腰掛けとを集めた、あるいは役場の物置より、あるいは小学校の

倉の隅より、半ば壊れて用に立ちそうにないものをそれぞれ繕つてともかく、間に合わした。

明日は開校式を行なうはずで、豊吉自らも色んな準備をして、演説の草稿まで作つた。岩——の土族屋敷もこの日はそのために多少の談話と笑聲とを増し、日常さびしい杉の杜付近までが何となく平時と異つていた。

お花は叔父のために『君が代』を唱うことに定まり、源造は叔父さんが先生になるというので学校に行つてもこの二、三日は鼻が高い。勇は何で皆が騒ぐのか少しも知らない。

そこでその夜、豊吉は片山の道場へ明日の準備のしのこりをかたづけにいつて、帰路、突然方向をえて大川の辺へ出たのであ

つた。「鬚」の墓に豊吉は腰をかけて月を仰いだ。「鬚」は今
豊吉を知らない、豊吉は昔の「鬚」の予言を知らない。

豊吉は大川の流れを見下ろしてわが故郷の景色をしばし見と
れていた、しばらくしてほつと嘆息ためいきをした、さもさもがつかり
したらしく。

実にそうである、豊吉の精根は枯れていたのである。かれは今、
堪たゆべからざる疲労を感じた。私塾の設立！　かれはこの言葉の
うち、何らの弾力あるものを感じなくなつた。

山河月色、昔のままである。昔の知人の幾人かはこの墓
地に眠つている。豊吉はこの時つくづくわが生涯の流れももはや
限りなき大海近く流れ来たのを感じた。われとわが亡友との

間、半透明の膜まくひとえ一重なるを感じた。

そうでない、ただかれは疲れはてた。一杯の水を求めるほどな氣もなくなつた。

豊吉は静かに立ち上がつて河の岸に下りた。そして水の濁ほどりをとぼとぼとたどつて河かわしも下の方へと歩いた。

月はさえにさえている。城山じょうざんは真つ黒な影を河に映してい
る。澁よどんで流るる辺りは鏡のごとく、瀬をなして流るるところは
月光碎けてぎらぎら輝ひかつてゐる。豊吉は夢心地になつてしまひに
流れを下つた。

河舟かわぶねの小さなのが岸に繋つないであつた。豊吉はこれに飛び乗る
や、纜ともづなを解いて、棹みざおを立てた。昔の河遊びの手練しゅれんがまだのこつ

ていて、船はするすると河心かしんに出た。

遠く河すそをながむれば、月の色の隈くまなきにつれて、河霧夢の
ごとく淡く水面に浮かんでいる。豊吉はこれを望んで棹みざおを振るつ
た。船いよいよ下れば河霧次第に遠ざかつて行く。流れの末は間
もなく海である。

豊吉はついに再び岩——に帰つて来なかつた。もつとも悲しん
だものはお花と源造であつた。

(明治三十一年八月作)

青空文庫情報

底本：「武藏野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武藏野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「国民之友」

1898（明治31）年8月

入力：土屋隆

校正：蔣龍

2009年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

河霧

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>